

「平和学習から学んだこと」

走潟小学校 六年 原田 晃成

みなさんは、平和は当たり前だと思いませんか。

しかし、平和は当たり前ではありません。今、ぼくたちが美味しいご飯を食べられることや、家族と笑い合えることも当たり前ではありません。

ぼくたちは、5月に修学旅行で長崎に行き、平和について学びました。

行く前には、事前学習で平和のことについて自分で調べました。そこで、ぼくがおどろいたことは、今も核兵器を所有していたり、作っていたりする国があるということです。世界はこれまでに、戦争からは何も生まれないと学んだはずなのに、なぜそんな危険な兵器をもっているのか疑問に思いました。

ぼくは、修学旅行で、戦争の被害や戦争の跡、戦争中の人々の暮らしがどのようなものだったのかを自分の目で見たり、耳で聞いたりして、心で感じたいと思いました。

本番を迎えた修学旅行。

1日目には、フィールドワークをしたり、原爆資料館に行ったりしました。原爆資料館には、焼け焦げた衣類や、まだお米の入っていたお弁当箱もありました。戦争はこんなにもひどいものだと思いました。特に印象に残っているのは、長崎に実際に落ちた「ファットマン」という原子爆弾の模型です。

ファットマンは、ぼくよりも大きく、TNT 火薬 2200 トン分の威力で、浦上天主堂の石でできたマリア像を吹き飛ばしたと聞き、信じられませんでした。だから、フィールドワークで爆心地に行き、浦上天主堂を見て、それが真実だと知り、本当に驚きました。

その後、自分が白血病にかかって苦しい思いをしながらも、平和を訴え続けた永井隆博士とその子どもが住んでいた如己堂に行き、平和公園に行きました。

まず、目に入ったのは、水を吹き出す平和の泉です。そこには、「原爆で亡くなった人々が、天国で水をたくさん飲めるように」という願いが込められていることを知り、戦争の悲惨さを改めて感じる場所でした。そのおくには、高さ 12 メートルもある平和祈念像がありました。

平和祈念像には、世界平和や原爆の悲惨さを教える深い思いが込められていること

を知りました。この像を見て、たくさんの人が平和を願い、戦争で亡くなった方のご冥福を祈っているのだと思いました。

フィールドワークの後に、平和講話を聞きました。4歳のときに被爆された長野靖男さんから話をうかがいました。第二次世界大戦で亡くなった人数が全世界で約8000万人もいたということを聞き、胸が苦しくなりました。

ぼくが一番心に残ったことは、被爆者の方々が、国連に訴え続けたということです。その結果、国連法で核兵器廃絶が決まったそうです。長野さんは、講話の最後に、「人類は『核のない世界』、『ジェンダー平等の世界』へ一歩ずつ歩んでいる。」とおっしゃっていました。

2日目には、当時の小学生が作った防空壕である、無窮洞へ見学に行きました。そこには、教室やトイレ、台所までありました。人の手で作ったとは思えないほどの広さに圧倒されました。

平和学習を通して学んだことは、今までは教科書でしか知らなかった「戦争」が、多くの人の命をうばったということや、平和とは、戦争や紛争がなく、貧困やいじめもない、当たり前の日常が送れるという、戦争は日本だけでなく、全世界で多くの人々を苦しめたのだと知りました。

だからこそ戦争はしてはいけないのです。戦争は、今も世界のどこかで争いが起き、当たり前の日常をうばわれている人々がいます。

日本に住むぼくたちは、平和を「当たり前」だと思ってはいけないのかもしれませんが、世界で起きている争いごとをなくすことは難しいかもしれません。だからぼくは、「けんかをなくす」、「差別をしない」など、身近なことに取り組んでいきます。そして、いつの日か、世界の平和が「当たり前」になる未来が訪れるまで、自分にできることに取り組んでいきます。